京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十三卷　第二號

大正十年八月一日發行

論叢

租稅に於ける給付能力の原則・・・・法學博士　神戸正雄

累進稅說の統計的觀察・・・・法學士　汐見三郎

中世都市の發達・・・・文學博士　三浦周行

農業勞働問題・・・・法學博士　河田嗣郎

時論

大正十年度の豫算を讀む・・・・法學博士　小川鄕太郎

說苑

八時間勞働制の沿革・・・・法學博士　山本美越乃

井リヤム・タムスンの分配論・・・・經濟學士　堀經夫

雜錄

史的唯物論略解・・・・法學博士　河上肇

家畜保險に就て・・・・經濟學士　野口正造

雜錄

史的唯物論略解（三、完）

（Borchardt, Der historische Materialismus の主要なる部分の意譯）

河上肇

史的唯物論は個々の出來事を說明しやうとしてゐるのでは無い、その職分は、社會的變革の理解に必要な鎖鑰を供給するに在る。――吾々は以上の叙述により、斯ういふ結論にまで達した。そこで殘る所の最後の、しかし最も重要な問題は、如何に史的唯物論が此の社會的變革を說明するか、と云ふことである。

『社會的變革』とは如何なる意味であるかについては、吾々の既に說明した所だから、茲に繰り返す必要はない。しかるに一の國民がその下に生活する所の、社會狀態の總體は、絕えず變化してゐる。それは、僅かしか距つてゐない時代と時代とを比較して見ても、すぐに分かることである。例へば今日の時代と、吾々の祖父の時代卽ち七、八十年前と、を比較して見ると、吾々の智識と技能と（科學、技術、學術）が著しい發達をしてゐるのが先づ第一に眼に着くであらう。しかし之と共に、吾々の外部的の生活關係全體が、家庭內に於ける吾々の私生活や、吾々の公の共同生活が、亦た同樣に著しく變化してゐる。何が善であり惡であるか、何が正であり邪であるか、何が美であり醜であるかについての、吾々の考も大變に變つてゐる。吾々は多くの事柄について、吾々の祖父が考へたのと全く違つた考へ方をしてゐる。それと共に又、吾々の道德上及び法律上の諸制度、例へば吾々の法律の如きものも、種々本質的の變化を受けてゐる。宗敎に對する吾々の考へ及び宗敎的感情そのものについても、同樣なる本質的の變動が行はれてゐる。更に生活資料を得る方法（所謂經濟關係）、卽ち農業、商業、交通業、工業等が全く面目を變へて居り、それに伴うて所有權の制度も亦た同樣の變革を受けてゐる。戰爭に

關する事柄も同じことだ。戰術から武器から、全く其の面目を改めてゐる。ところが階級秩序卽ち狹義に於ける一國民の『社會的狀態』なるものが亦た、前代に比べると著しい差別がある。百年前の獨逸で階級として目立つてゐたものは、貴族と金持の町人とで、無產者は有產者のほんの附屬物たるに過ぎなかつた。しかるに今日では、階級としての貴族は全く隱れて仕舞つて、有產者と無產者とが前面に立つてゐる。卽ち階級相互の關係に於ける推移も亦た、明白な譯である。なほ此の短い期間に政治上の制度卽ち種々なる階級への國權の分配が、如何に變つて來たかは、今更言ふを待たざる所である。

此の如く、社會的發展の絕えざる流れは、極めて僅かの時期の間に、獨逸國民の生活を全然變化せしめてゐるが、之と同じことが、總ての時、總ての國民に通じて行はれてゐる。今、唯物史觀は、歷史家が是れまでのやうに、その全勞力を單に出來事の上に限ることなく、更に進んで、各時代に於ける此等の社會狀態幷びに一の時代から他の時代に亘つて行はるゝ社會狀態の變動につき、十分なる研究と叙述を爲さんことを希望する。

しかし何はさて舍き、吾々の頭に先づ疑問となつて來るのは何故といふ問題である。何故社會狀態は變動したのか？　何故古い形態のまゝで止まつてゐないのか？　何故それは斯く〳〵の狀態に變動し、それ以外の狀態に變動しなかつたのか？　斯ういふ問題が先づ起るのであるが、史的唯物論は之に答へて次の如くいふ。

總ての社會關係は――既に述べたやうに――絕えず變化する、藝術及び學問、道德、法制、私生活、所有權の制度、軍事、階級の秩序、政治上の制度、其の他一切のものが變化する。しかし此等一切のものゝ根底に經濟關係の變動が横はつてゐる

史的唯物論は斯く主張する。之によつて觀れば、それは、歷史的事件を一々經濟關係から說明しやうと云ふやうなものとは、全く違つたも

のである。唯物史觀は、一定の時點に於ける經濟關係が斯く〳〵であつたから、それで此の事件又は彼の事件が起らなければならなかつたのだ、と言ふのではない。その言はんとする所は一定の時代に於ける經濟關係が變動したから、それで其の他の社會關係も亦た變動したのだ、といふ點である。――人間は何時でも彼等の經濟的利益に從つて行動するものだといふやうな觀察は、固より唯物史觀と何等の關係もない。

しかし唯物史觀の主張する所は、只それだけではない。何故といふに、物を考へる人に向つては、何によつて經濟關係は變動させられることに爲るのか？　何故一定の狀態に止まつてゐないのか？　といふ問題が、直ぐに起つて來るからである。そこで唯物史觀は之に答へて、それは人間が彼等の生活資料を自然から得來たる方法が、時の經過に於て變動するからだ、生產方法が變化し、それにつれて經濟諸關係の變動が起るからだ、と言ふのである。

問題はまだ次ぎ〳〵にと起る。――然らば何故生產方法は變動するか？　史的唯物論は之に答へていふ、それは勞働の生產力が絕えず高められなければならぬからであり、さうして何故勞働の生產力が絕えず高められなければならぬかと言へば、それは人間の物質的欲望が絕えず增加するからである。

かくて吾々は遂に物質に歸着すると同時に、史的唯物論の排列する所の、因果の全系列（原因及び結果の連鎖）を明かにした。以下吾々は更に此等因果の連鎖の一々について、若干の考察を施すであらう。

人間の物質的欲望、即ち衣食住その他のものに對する欲望は、最古の時代から今日に至るまで、絕えず增加して來た。此の點に關しては何故さうであるかと云ふ疑問が更に起り得るが、姑く吾々の研究を歷史の範圍に限るならば、吾々はそれが一の歷史的事實であると云ふことの定立を以て一應滿足しなければならぬ。そこで

歴史を振り返つて見るに歴史の舞臺に現はれて來る民族は、何れも皆、時代を追うて其の人口數を增加してゐるが、これは勿論當然のことである。何故といふに、人口數が殖えもせず減りもせないと云ふやうなことは、極めて例外的な事情の下に於てのみ起り得るので、一般的に言へば、人口が殖えなければ必ず減つて來る。ところが人口が段々減つて來るやうでは、その民族は僅かの時代を經過する中に、歴史の舞臺から消えて仕舞ふことになり、暫くは地上に殘存してゐても、歴史的には無視して差支ないものになつて仕舞ふ。

ところが人口が增加すれば、それにつれて、今までよりもより多くの衣食住其の他のものが必要になつて來る譯であるが、欲望の增加は、此の第一原因の外、更に第二の原因によつて促される。蓋し歴史の正常なる經過に於ては、各時代は前時代よりも次ぎ〳〵に『より高く文化した』ものになる。卽ち前の時代の各個人に比べて、後の時代の各個人の方が、より多くの物質的欲望を有つことになる。一例を擧ぐれば、今日は立ちん坊でも夏は氷を飲み、無産者でも夜は電燈をつけてゐるが、こんな事は、百年前の大名でさへ爲し得なかつたところである。時代を追うて實現せらるゝ所の、各個人の欲望の此の如き增加は、吾々の名づけて『文明の進步』と謂ふ所のもので、それは歴史の到る所に於て吾々の看取し得るものである。

之を要するに既に人口數の增加があり、更に其れに加へて個々の個人の欲望の增大があり、兩者相待つて茲に物質的欲望の急速なる增加がある。今、史的唯物論によれば、これが、歴史上に於ける一切の成生が依つて以て出發する所の、根本事實である。

この增加する所の欲望は必ず滿足されなければならぬ。茲に大事な點は、それが必ずさうされなければならぬ(müssen)と云ふ事だ。それは全然人間の自由意志に依存しない。何故といふに、もし增加せる人間に向つて衣食住が生產されず、又彼等の增加せる欲望の滿足が行はれな

ければ、飢餓や疾病や貧困や衰亡が必然に生ずべき結果だからである。しかし言ふまでもなく人間は自分自身の利益から、その物質的必要が命ずる所のものを、恰も意欲することになる。卽ち人間の意志は、此等の欲望を滿足すべき手段を求むることに向けられる。しかるに斯かる手段は、只勞働の生産力の發展に於てのみ求められる。それ故、何うすれば同じ分量の勞働を費してより多くの生産物が得られるかと云ふ問題は、事實總ての時及び總ての國々に於て人間が熱心に其の解決に從事する所のものである。

さて勞働の生産力を高めるためには、人間は絕えず新たな勞働方法と新たな勞働具（道具）とを、工夫し應用しなければならぬ。試に獨逸の歷史を例にとつて言つて見れば、最初ゲルマン人は、戰爭（掠奪）、狩獵及び牧畜によつて其の生活資料を得てゐたのだが、其の後農耕を主とするやうになり、彷徨生活から定住生活に移つた。それより數百年の間、農耕は益々集約的になつたが、しかし其れだけでは、絕えず增加して來る欲望を滿足するに足りなかつた。そこで分業が起り手工業が成り立ち、それと共に商業が次第に重要になり且つ益々繁榮して來た。さうして此等の手工業及び商業は、勞働方法及び道具の絕えざる進步の下に勞働の生産力をば絕えず高めながら、遂に中世の末期に至つた。そのうちに資本が勢力を有つて來て、勞働をば其の支配の下に置き、勞働者をば計畫的な共同作業に結合するといふ一の新たなる手段によつて、生産力の一大進步を齎した。それが所謂手工的工場工業なるもので、獨逸では十六世紀このかた行はれ始めたものである。しかるに十九世紀になると今度は全く新たな勞働手段たる機械が應用されることに爲つた。さうして其の結果生産力が如何に巨大な發達を遂げたかは、言を待たざる所である。しかし機械時代に這入つてからでも生産の進步は寸時も停止したことは無い。卽ち先づ個々の工場が次第に擴張されて來た。次いで別々の工場が聯合して、最初にはカルテルといふ弛い形態を採り、次ぎにはより密

なトラストといふ形態を採り、最近には更に其の合同が行はれてゐる。此等は總て物を『安く』生産するがため、卽ちより僅かな勞働を費して同一の又はより多くの結果を得んがため、更に言ひ換ふれば、勞働の生産力を高めんがために起つた事である。獨逸に於ける經濟的發展の此の簡單なる概觀を以てするも、勞働の生産力を高むるための絕えざる努力により、如何に生産方法が變革され來つたかを見るに足る。

之を要するに、物質的欲望の絕えざる增進は人間を驅つて常に勞働の生産力を高むることを工夫せしめ、その目的のために絕えず新たなる勞働手段と新たなる勞働方法とを應用せしめ、かくて絕えず其の生産方法を變革せしむるものである。

併し之で始めて基礎が出來たといふだけで、史的唯物論のより重要な學說は、更に此の上に建てられる。史的唯物論の主張する所によれば生産方法の變革からして社會秩序の變革が生ずるのである。既に屢々述べたやうに、社會秩序とは一國民內に於ける階級の編制のことである。これが、生産方法の變動すると共に、變動するといふのである。再び獨逸の歷史について言へば、戰爭、狩獵及び牧畜が主たる生業であつた原始時代には、生産が幼稚であつたと共に階級秩序も亦た甚だ簡單であつて、(恐らく戰爭で捕虜になつた者で　從て種族を異にせる所の不自由民を除外すれば)、國民の內部には單に一個の階級が在つただけである。其の後彷徨生活をやめて土地に土着するやうになると、强大な君主と大きな土地の領主とが出來た。更に第六世紀から第十世紀にかけて、農業が進步するにつれ、種々の階級が出來て來たが、就中、大きな地主と農奴との階級が其の主なものである。手工業が成立し、それに伴うて國內商業が成立すると、同時に又、全く新たな階級として町人階級が出來た。更に近代に這入つて、資本が生産上決定的の勢力を有つやうになつてからは、　たに資本家階級と勞働者階級との對立が

行はるゝやうになつた。斯樣に、勞働の生產力を高めんとする人間の絕えざる努力は、史的動力として、卽ち『社學を形成する』力として働くものである。それは新たなる階級を作り、階級相互の地位を動かす、卽ち一言にして蔽へばそれは社會秩序を變革する。

此の如く社會的變革は、經濟的諸關係によつて說明される。さうして道德及び法律に關する人々の思想は、言ふまでもなく、社會秩序の變動によつて變動する。例へば手工業や商業の十分に發達した中世の都府に於ける市民が、手工業も商業も成立せず、從て都府といふものも無く、市民といふものもゐなかつた其の昔の時代に行はれてゐた所の、法律や習慣を其のまゝ正しいものとして受入れてゐると云ふ事があるだらうか？　新たなる關係は、法律の範圍に於ても、亦た新たなる欲望を作り出す。さうして其の新たなる關係は、絕えざる社會的變革によつて作り出される。――同樣のことは、おのづから宗敎上の思想及び感情について、私生活について、家族關係について、更に又一國民の政治制度についても、當て嵌まる。かくて吾々は、唯物史觀の思想の過行（ゲルンシンガンジ）を、次の如く摘要することが出來る。

物質的欲望の絕えざる增進は、人間を驅つて間斷なく勞働の生產力を高めることに注意せしめる。その事は、常に新たなる勞働手段と勞働方法との應用によつて行はれ、從て全生產方法の不斷の變革を促す。是がため社會狀態がまた變革され、階級相互の關係が變動し、新たなる階級が成立し、階級對立と階級鬪爭とを生み、かくて此等の社會的變革は又、種々なる政治上の出來事、卽ち戰爭や、條約や、立法やが出つて生ずる所の、機緣を供し且つ地盤を作る。同時に又、社會的變革によつて人間の考へ方も變つて來る、卽ち法律や、道德や、宗敎やに關する人間の思想が、彼等の外部の生活關係と共に變つて來る。

是れが史的唯物論の實際に主張してゐる學說の內容である。（終）